
背筋、ぴん。

あめ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

背筋、ぴん。

【Nコード】

N6686A

【作者名】

あめ

【あらすじ】

大人たちからしたら、まだまだ子どもでも、色々考えているし恋だっけするんです。そしてそれが、私の背筋を伸ばしてくれる。

「背筋を伸ばしていなさい」

幾度も繰り返される母の忠告を、私は何時も適当に受け流していた。そのうち、私も歳を重ねて、まず二十歳になる。お酒も煙草も、その頃には深く知っているかもしれない。

適当に遊んで、それなりの結婚をするのかな。子どもを産んで、自由奔放に生きられなくなっても、それが幸せだと思えたりして。

終には、白髪とか生えてきちゃって。勿論夫と一緒に。ロマンスグレーだっけ？あれ、ちょっと良いと思う。歳を重ねて、徐々に白く変化していくなんて、まっさらに潔い気がするもん。

それで、もしかしたら腰を丸めて歩くようになるのかもしれない。私の祖母も今その状態だ。一見平気そうで、実はちよつと辛そう。

でも、私はまだ十四。腰を丸めるどころか、成人だって想像がつかない。だから背筋を意識するなんて、ただの疲れる行為でしかないと思ってしまう。

「おはよー」

「おはよーじゃねえよ。もう昼だぞ」

みんながお弁当を広げる教室に入り、挨拶した。それに誰よりも早

く反論したのは瞬太だ。

中学に入って初めて仲良くなったグループのうちの一人。二年になっても何故かクラスが一緒に、気付けば一番仲の良い男友達になっていた。

「良いじゃん、別に。いやあしかし、遅刻って贅沢だよね」

「意味判んね」

瞬太のやつ、何にも知らないんだなあ。お昼に遅刻してくると、朝とは違う静けさの中を歩けるのに。それでつい人生考えたりしちゃうのに。そんな贅沢な時間を知らないなんて。

「損してるよ、瞬太」

「や、だから意味判んないって。それより亜美、聞いた？大輔と京子のハートがガッちゃんって」

手でハートの半分の形を作り、それを『ガッちゃん』と組み合わせた。一つのハートが出来上がる。

「え、本当に？」

「まじまじ」

大輔と京子も仲良しグループの中の大切な友達だ。

「大輔やったじゃん。ずっと京子好きって言ってたもんね」

「やっとな感じでよな。まあよかったよ。記念に俺らも付き合うか」

「あほ」

彼は冗談だよ、と顔を皺くちやにした。私が馬鹿とかあほとか言っても、瞬太は何時も笑ってる。そういうの、時々凄く有り難い。

何だか最近、瞬太はやけに男の子っぽくなってきた。声だって低いし、背中も大きくなったし、それが不意に、私を戸惑わせることがある。

私は友達のところへ行き、一緒にお弁当を食べた。この時間が学校の中では一番好き。自然に笑顔になってしまう。

「大輔と、京子かあ」

次の時間は自習で、私は一人屋上で考え事をしていた。

「ね」

後ろからの声に振り返ると瞬太がいた。

「びつくりするじゃん」

「びつくりさせたじゃん」

お互いに目を合わせ、笑った。そこには確実に平和な時間が流れて

いる。

「ね、瞬太さ」

「ん？」

「自分の人生考えたことある？」

私の質問に、彼は少し不思議な顔をした。

「まあ、ちよつとはな」

「ふうん。ね、どんな？」

瞬太はちらりと私を見て、再び前に向き直った。その横顔が大人っぽくて、何だか変な感じがする。

いや、本当は判っているんだ。変な感じというのは、彼を意識してしまっているから。友達としてでなく、一人の男のひととして見ている。普通にしているても、最近何かが違ってしまふのだ。

現に今こうして二人で居るときも、妙に意識してしまう。隠しているけれど、お互い柵の上に乗せた腕が触れやしないかとドキドキしている。触れてしまえば気持ちがばれるのではないかと思い、怖い。

「亜美は？」

「私は…普通だよ。普通に歳とって」

「だよな、俺も。でも一個譲れないことがあってさ」

私は彼の顔を覗き込んで次の言葉を待った。

「笑わない？」

何時になく照れ臭そうなその表情に頷く。

「…結婚して、子ども産まれても、奥さんと名前で呼び合いたい」

私は、笑わなかった。どちらかと言うと真剣だったと思う。だって私も同じことを考えていたから。

「わかるよ！私も、そうだもん！お母さんとかお父さんって呼び合うの、何か嫌」

「だよな！幾つになってもデートとかして」

「うんうん！あ、あとさ、おじいちゃんおばあちゃんになっても自転車二人乗りしたい」

「うわそれ、すげえ良い」

何がそんなに面白いのか、気付いたら私たちは何十分もその話をした。でも楽しそうに笑顔で話す瞬太が、嬉しかった。

話し疲れ、私たちは校庭やそれを囲う木々を眺めていた。沈黙も会話みたいないな、心地良い時間。

そしてふと、本当にさり気なく彼は呟いた。

「…結婚しようか」

思わず勢い良く頭を彼のほうに向けた、その時。私の肘は彼のそれに、ほんの僅かに触れた。

その瞬間、私は自分の背筋がぴん、と伸びたのを感じた。…あれ？

「…その前に、付き合うか」

何も言わずにいる私に、彼はまた付け加えた。

「あの…さ。その……言つとくけど、俺まじだよ」

お母さん。私、まだまだ十四の子どもだけど、何も考えてないわけじゃないんだよ。ただ、あれこれ言われても身をもって体験しないとピンと来ないだけ。

私の背筋を伸ばさせたのは母の言葉でなく、恋だ。まさか、恋にそんな秘密があるなんて。やるなあ、恋。

「まじ、かあ…。うん、良いかもね。二人で歳とるのも」

「うん。よし、可愛い老夫婦を目指すぞ」

空に向かって伸ばした彼の腕が、とても長く見えた。二人の重なった笑い声も、世界中に聞こえてるんじゃないかと思う程、澄んでいる。

歳をとって、結婚して、子ども産んで、ずっと名前で呼び合って、
ロマンスグレーを愛しく眺めたい。

そしてもっと欲を言えば、やっぱり私は背筋の真つすぐな白髪のお
ばあちゃんになりたいな。だって、そのほうが格好良いもん。

（後書き）

純粹で可愛らしい、日常的なものを書きたいと思い、主人公の年齢もちよっと若めにしました。背筋の伸びたひとに、私もなりたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6686a/>

背筋、ぴん。

2010年11月25日03時18分発行